

マッチングアプリにみる後期近代の恋愛観  
－「ときめき」と「代替可能性」に着目して－

2023 年度 卒業論文

学籍番号 20SG1094

氏名 宮田明音

# 目次

目次	i
I 序論	
1. はじめに	1
2. 出会い文化	
2-1. 大正期までの結婚文化	2
2-2. 見合い結婚から恋愛結婚へ	3
2-3. 現代における結婚相談所	4
2-4. 出会い文化の変遷	4
3. 恋愛における「ときめき」	5
4. マッチングアプリというメディア	
4-1. マッチングアプリの特性	6
4-2. マッチングアプリ利用者の属性	6
4-3. マッチングアプリのプロフィールと出会い	7
4-4. マッチングアプリにおける相互作用	7
5. 恋愛の代替可能性	
5-1. 「もっといい人がいるかもしれないシンドローム」の広まり	8
5-2. マッチングアプリにおける恋愛の代替可能性	9
6. 先行研究における課題と本研究の目的	9
II 調査	
1. インタビュー調査	
1-1. 対象と方法	10
1-2. 調査方法	10
1-3. 研究における倫理的配慮	10
1-4. 結果	
1-4-1. マッチングアプリ利用と恋愛における「ときめき」	11
1-4-2. マッチングアプリ利用と恋愛の代替可能性	13
2. オンライン調査票調査	
2-1. 対象と方法	15
2-2. 調査方法	15
2-3. 研究における倫理的配慮	19
2-4. 結果	

2-4-1. マッチングアプリ利用と恋愛における「ときめき」 .....	19
2-4-2. マッチングアプリ利用と恋愛の代替可能性 .....	21
3. 「ときめき」に関する小調査	
3-1. 対象と方法 .....	24
3-2. 調査内容 .....	24
3-3. 結果 .....	24
III 考察	
1. 本研究の目的と結果のまとめ .....	25
2. 本研究の結果と先行研究の関連 .....	26
3. 本研究の意義 .....	27
4. 本研究の問題点・課題 .....	27
5. 今後の検討課題 .....	28
参考文献 .....	30

## I 序論

### 1. はじめに

Giddens は、著書『親密性の変容』の中で、親密な関係性が近現代社会でどのように変化しているのか検討する。近代以前の社会における婚姻は、性的魅力やロマンチック・ラブにもとづかず、むしろ家族を生みだしたり財産相続を可能にしたりする経済的脈絡と結びついている場合が多かったという (Giddens 1995)。これに対し、18世紀後半にはロマンチック・ラブが出現する。ロマンチック・ラブは、相互の魅力にもとづいた対等な関係性であるという期待 (幻想) が持たれたものの、実際には男性による女性の支配を導く傾向が強かった (Giddens 1992:263)。

その後、自由に形成できるセクシュアリティや自己認識の発達により、ロマンチック・ラブという理念は分解しだしたと Giddens はいう。代わりに、「ひとつに解け合う愛情」が台頭したことで、仮に結婚している夫婦の愛情関係がうまくいかない場合、一緒にいるよう縛られることなく離婚する選択もみられるようになった。後期近代の恋愛観として、理想の夫や妻を見つけ出すのではなく、理想の愛情関係である「純粋な関係性」を見つけ出すという考え方が重要視されているのである (Giddens 1992:263-264)。

このような議論を受けて、Illouz は次のように述べる。

「スピード恋愛では、どんなに濃密で親密な恋愛であっても、別れるという簡単な選択肢が当たり前のように使われるようになった。多くの人々が『デート』し、『ショッピング』し、恋愛や性的関係の可能性のある安価な世界市場で選り好みする消費者となっている。究極の商品化である (Illouz 2019:169)。」

一方で Bergstrom は、次のように述べる。

「オンライン・デートに象徴される現代の恋愛の危機とされるものは、フランスの人類学者メラニー・グーラリエの言葉を借りれば、恋愛の『永続的な危機』であることが判明した。結婚やコミットメントされた関係が脅威にさらされているという主張は、愛の終わりを告げるどころか、こうした規範を再確認することに貢献する。当初からお見合いサービスを取り巻いてきた憤慨や社会批判は、ロマンチックな愛の弱体化を物語るものではなく、むしろこの理想の歴史的かつ継続的な強さを物語るものなのである (Bergstrom 2022:37)。」

このような議論を踏まえ本稿では、マッチングアプリがその利用者の恋愛観に与える影響を検討したい。マッチングアプリとは、スマートフォン専用アプリケーション形態で導入されたいわゆる「出会い系サイト」と呼ばれるインターネット異性紹介事業のことであり、交際相手や結婚相手もしくは交流等を求める異性の仲介サービスと定義される（藤村・福井 2020:59）。マッチングアプリを利用する際には、相手の学歴や身長、趣味など「スペック」の希望を登録することができる。この機能を用いることで、利用者は自分の理想とする相手をより効率的に探し、コミュニケーションを取ることができる。このようなサービスを利用することで、学校や職場といった身の回りの環境だけでは起こり得なかった出会いが生まれ、出会いの幅が広がると考えられる。

マッチングアプリの利用者数は膨大だ。アプリ市場分析サービス「App Ape」を使ったAppliv独自調査によると、2022年6月時点でPairsには117万人以上、Tinderには76万人以上、タプルには55万人以上もの月間アクティブユーザーが存在するという（Appliv2024）。このように、数えきれないほどの恋愛対象と出会うことを可能にするマッチングアプリを利用することに対して、2つの仮説を立てる。

第一に、恋愛が形式的なものになり、「ときめき」を感じにくくなることだ。マッチングアプリにおける恋愛の進め方は、ある程度パターン化されているといえる。具体的な例を挙げると、おすすめ表示や検索機能から見つけて「いいね」した相手とマッチングし、そこからメッセージのやりとりを開始、通話をしたのち対面で会うといった流れが考えられる。本来であれば個々人やその相互関係によって異なる恋愛の進み方がパターン化することで、恋愛において相手やその状況にドキドキする「ときめき」が減少するのではないだろうか。とりわけ、マッチングアプリ内で数多くの恋愛対象候補から一定の条件で絞り込みを行う検索機能がそれを促進すると考える。

第二に、これと対照的に、アプリによって恋愛対象の代替可能性を感じ、恋愛の理想が上がることだ。前述のように、マッチングアプリには数え切れないほどの登録者がいる。利用者は、数多くの恋愛対象から自分に合う相手を選ぶという行為を通してその数の膨大さを実感するだろう。このことは、特定の人と会ったり交際したりしても、自分にとってその人以上に理想的な相手が存在する可能性を考えることにつながるのではないだろうか。

本稿では、「マッチングアプリを利用することで恋愛における『ときめき』は減少するのか」「マッチングアプリを利用することは恋愛の代替可能性を見出すことにつながるのか」を明らかにすることを目的とする。まず、日本における出会いの歴史に触れる。

## 2. 出会い文化

### 2-1. 大正期までの結婚文化

明治時代以前の村落社会では、「見合い」という慣習自体があまり浸透していなかった

といわれている。これは、多くの人が一生涯を通じて地理的に移動することがほとんどなかった時代には、同じ村落内で結婚する「村内婚」が一般的であったためである。このように村落共同体が強固な時代には、「若者仲間」と呼ばれる同輩年齢集団によって結婚の仲介がなされていたという（阪井 2021:32）。

明治時代になると、武家社会の儒教道德の浸透や遠方婚姻の普及により、若者仲間の権威が急速に崩れていった。交通の発達や市場経済の浸透といった「都市化」という社会構造の変動によって通婚圏が拡大し、ほかの部落に配偶者を探し求めることが徐々に一般化した。幼馴染や若者仲間などが結婚に口出しすることは困難になった一方、親や身内の結婚に対する利害関係は強まったため、おのずと結婚の自由が制限されていった（阪井 2021:41-42）。

このような規範の中では、「媒酌人」の介在が「正しい結婚」の条件であった。媒酌結婚を規範化する言説が、「家族主義」と「個人主義」を説いているという事実より、媒酌人の存在の有無は、結婚する者の「意志」や「恋愛」が社会的・家族的に承認されたものであるか否かを判別する、ある種の「指標」になっていたと考えられる。形式的にでも媒酌人を介在させることで、「個人の意志」や「恋愛」が社会的承認を得ていることを外形的に示すことができたという事実から、媒酌人とは「個人の意志」を「社会的なもの」へと昇華し、「恋愛」の社会的承認を示す存在だったといえる（阪井 2021:84）。

大正時代になると、結婚はともかく「恋愛」そのものを肯定する声がより一層高まり、恋愛結婚を頭ごなしに否定するような論者は「守旧派」や「時代遅れ」と見なされた（阪井 2021:85）。大正期には恋愛が「結婚」によってだけ正当化されるという「恋愛結婚イデオロギー」の浸透が見られ、結果的に戦前期には「恋愛結婚」と呼ばれるもののほとんどが見合い形式や媒酌人を立てる形式をとっていた（阪井 2021:96）。

## 2-2. 見合い結婚から恋愛結婚へ

「商売」や「職業」としての結婚媒介業や相談業が著しい隆盛をみせたことには、明治期の急速な都市化が深く関係している。血縁・地縁でつながる村落共同体から離れ、都市に流入した人々が増加し、「結婚難」という新たな社会問題が生じたためである。血縁や地縁に頼ることができない人々の救済として確立された結婚媒介業を、特に男性は「学校出の会社員」、女性は「女学校出のお方」、概して「教育のある者」が利用していたという（阪井 2021:119-121）。

1920年代ごろになると、結婚媒介を国策として生かすために国営化し、国家によって管理すべきだという主張が登場する。さらに、日本伝統の「美風」である結婚媒酌を、営利や恩に任せた「私的」なものとして放置することは国家にとって大きな弊害となると考え、「公的」なものとして国家の管理下に置くべく、法制化しようという動きも出てくる（阪井 2021:123-124）。

戦後、新しい憲法の制定により、結婚はもはや「家」同志の結合ではなく、「個人」同

志の対等な関係であることが法律で明示された。恋愛結婚の割合は一貫して上昇し、1965年前後には見合い結婚の割合を上回ることになる（阪井 2021:156-159）。1960年代頃までは、恋愛結婚の方が恥ずかしい、あるいは「劣等だ」という社会意識が残っていたが、次第に見合い結婚こそ「恥ずかしい」とする風潮が社会を支配し始めていた（阪井 2021:169）。

1990年代に入ると、結婚相手と知り合ったきっかけのトップだった「職場や仕事で」が減少し、2000年になると「友人・きょうだいを通じて」がトップに躍り出る。この変化には、女性の就業年数が長くなり、男女ともに非正規雇用の割合が増加するという経済構造・就労構造の変化に起因する「個人化」が関係していると阪井は述べる。さらに、「会社の上司が部下のプライベートに介入すべきではない」という規範の登場もその要因であり、夫婦関係は“純粋に”二人の関係であるべきだと考えられるようになったという（阪井 2021:188-189）。以上のことから、日本における結婚に着目してみても、時代とともに個人の考えや希望が重視されるようになっていったといえ、これは「純粋な関係性」が求められるようになってきたという Giddens (1992) の主張に重なると思われる。

### 2-3. 現代における結婚相談所

山田は著書『「婚活」現象の社会学』において、結婚相談所の仲人たちによる「見合い結婚」についての語りを分析・検討している。山田によると、結婚相談所には恋愛感情と生活の安定の両方を求めて入会している人がほとんどであり、恋愛感情が芽生えなければ交際に進展しないという点で昔の見合いと異なっているという（山田 2010:72）。さらに、「恋愛しなければならない」「外見がよくなければならない」「コミュニケーション上手でなければならない」にもかかわらず、依然として家族主義的結婚規範・性別役割分業規範が残存しているため、結婚難が深刻化しているとも述べる。これらのことから、現代日本社会における見合い結婚と恋愛結婚は、結婚条件として実質的な差がなくなっていると山田は分析する（山田 2010:79）。

このことから結婚相談所の利用者は、パートナーに対して「ときめき」を感じることを含んだ恋愛要素も求めるようになっていったといえる。

### 2-4. 出会い文化の変遷

日本において、恋愛結婚率がお見合い結婚率を上回ったのは1970年代後半のことである。このことにより、1960年代後半から80年代の若者にとっては恋愛交際が憧れの一つであったと羽瀨は述べる（羽瀨 2022:190）。この時代、結婚目的のお見合いだけでなく、「合同ハイキング（合ハイ）」や「合同コンパ（合コン）」という恋愛、性行動や結婚のパートナーに出会うための大学生文化が定着していった。これは現代のマッチングアプリに通じる出会い文化であると考えられる。

1980年代から1990年代にかけて、固定電話を媒介とした「テレクラ」や「伝言ダイヤ

ル]、「ダイヤルQ」などのコミュニケーションが流行したのち、モバイル通信の先駆けとして「ポケベル」が登場する。次第に、ポケベルの番号をランダムに思いつきで入れ「ベル友」と呼ぶ友だちを探す行為が若者の間で流行した。ベル友探しの理由を「暇なとき友だちほしくて」と当時の若者は説明していたが、「恋人や友だちといつでも連絡が取れる」楽しさに加えて、「恋人やセックスフレンドを探すのに便利」と語る若者もいたという（羽瀧 2022:190-191）。

PHS や携帯電話の普及により、2000 年代には若者のポケベル文化が消滅した。携帯電話にインターネット利用の機能が付加されることで、出会い系サイトへのアクセスが容易になった。2010 年代よりスマートフォンが急激に普及すると、人間関係をつなぐことを目的として開発されるソーシャルメディアの利用が定着した。そして、メディアのモバイル化のプロセスから出会いに特化したマッチングアプリが出現したのである（羽瀧 2022:191-192）。見合い結婚から恋愛結婚の時代へと移り変わり、さらにインターネットが普及したことで、希望すれば誰もが出会いの幅を広げることのできる時代になったといえる。

### 3. 恋愛における「ときめき」

「時めく」という言葉の意味を国語辞典で調べると「うまい時節にぶつかり、勢力をえて、栄える。」とされており、「今を時めく」のように使われる。これとは系統の異なる「ときめく」は「期待やよろこびで、どきどきする。」とされており、「心ときめく」「胸がときめく」のように使われる（林 2013:845）。本稿における「ときめき」の定義は後者とする。

羽瀧によれば、マッチングアプリなどの出会い系サイトは、相手の学歴や年収、身長や体重、趣味などの「スペック」を希望登録することで、出会う人間の社会的属性を限定した上での「純粋な関係性」だという。パートナーとの結婚を考える場合に障壁となりうる階層差や趣味といった問題を、検索機能やその後の絞り込みによって出会う前あるいは出会いの段階から避けることが可能になるからだ。羽瀧は、このことにより恋愛交際における偶然がもたらす「ときめき」は低減するものの、出会いへの安心感は確実になるとしている（羽瀧 2022:192-193）。

また羽瀧は、現代の若者について、そもそも恋愛において「ときめき」を求めているいと述べている。その根拠として、青少年研究会が 2016 年に行なった調査において、恋愛交際相手に「ときめき」を求める若者が 12.9%しかいない一方で、「一緒にいるときの安心感」を求める若者は 74.1%であったことを挙げている（羽瀧 2022:193）。羽瀧が分析するように、恋愛における「ときめき」は若者に重視されなくなってきており、新しい出会いのメディアにおいてその傾向が顕著に見られると推察する。以下の調査ではこうした主張をさらに細かく分析したい。

#### 4. マッチングアプリというメディア

##### 4-1. マッチングアプリの特性

羽瀨によれば、既存の「出会い系サイト」の進化系として存在するマッチングアプリは、スマートフォンという機器の仕様によってより手軽にアクセス可能なサービスとして定着してきたという（羽瀨 2022:198）。

Illouz は、マッチングアプリ（サイト）利用者の特徴を「膨大な自己観察」を行い、「他者と自己の心理学的プロフィールをつなぐ才能」をもち、私的な自己の結晶のようなものを可視化させ、表象とテキストを通じて拡大され客観化された自己として「自己理解」を行なうことだとしている（Illouz 2007）。この記述が的確ならば、マッチングアプリを利用する若者は利用しない若者と比べて高い人間関係スキルやコミュニケーション能力も高いことが推測できるが、このような仮説は単純にすぎると羽瀨は述べる（羽瀨 2022:198-199）。

この仮説が真ならば、メディアを利用し人間関係を拡大する若者は家族や友人といった身の回りの人間関係も良好でないと説明がつかないうえ、そもそもマッチングアプリの利用者は出会いへの欲求をもつ者に限定されているからだ。出会いへの欲求のあり方が真面目かつ真摯なものであればこの仮説の検証に意味があるが、気軽なものであったら話が異なるという。こうしたメディアの利用においては、人間関係に関わる面倒なリスクを避け、手軽に相手を選択するという行為そのものが目的となりかねず、気に入らなければ簡単に人間関係からの退出が可能であることにより、離合の頻度が高まるとしている（羽瀨 2022:199-200）。このような考えから、羽瀨は対象を高校卒業以上の若者に絞り、マッチングアプリ利用に関する分析を行なっている。

##### 4-2. マッチングアプリ利用者の属性

羽瀨が行なったマッチングアプリの利用に関する分析では、男女ともに交際経験が豊富な大学生ほど出会い系サイト・マッチングアプリの利用者率が高いことが示されている（羽瀨 2022:201-202）。

また、従属変数をマッチングアプリの利用、独立変数を「交際経験人数」「性的なことに関心をもったことがあるか」「交際相手が欲しいかどうか」「現在の家庭・現在の学校生活・現在の人間関係のイメージ」「パソコンの所有有無」「一人暮らしか否か」として二項ロジスティック回帰分析を行なっている。分析の結果、大学生女子の出会い系サイト・マッチングアプリの利用者において性的関心の有無に強い正の相関が確認できた一方で、大学生男子においては利用と性的関心の有無に相関がみられない。大学生男子は、現在通っている大学に対する評価が「楽しくない」人ほど出会い系サイト・マッチングアプリを利用する傾向があるという（羽瀨 2022:202-203）。

さらに、男女ともに「付き合う相手が欲しい」と思っているかどうかと、出会い系サイト・マッチングアプリの利用との相関が弱いという結果がみられた。年齢が高くなればなるほど、出会い系サイト・マッチングアプリを利用する傾向はあるものの、年齢を統制しても交際経験人数が多い大学生ほど利用しているとわかる。また、電子メディアとの親和性は出会い系サイト・マッチングアプリの利用と関連しないと結論づける（羽瀧 2022:203）。

#### 4-3. マッチングアプリのプロフィールと出会い

大坂は、マッチングアプリにおける出会いの場面といえるプロフィールで重視することに着目して調査を行い、社会学的視点から現代の若者の恋愛・結婚観を考察している（大坂 2022:12）。インタビューによる調査結果からは、マッチングアプリにおいて料金を払っている男性が積極的に相手を見つける行動をして「いいね」を送り、女性はそれを選ぶ立場になっている構造を見出している。現代では女性に声をかけることができない消極的な男性が増えているという指摘もあるものの、マッチングアプリには料金を払って登録している時点である程度積極的な男性が集まってきていると述べる（大坂 2022:19）。

一方で、「どういう流れで会いましょうってなるのかよく分かんなくてめんどくさくなっちゃう。ずっとメッセージだけのやりとりになる」というインタビュー対象者の発言や、MMD 研究所の調査において「実際に会ってみたが、それ以降は何もない」という回答が最多となったことから、「いいね」に積極的であっても、マッチング後の行動には消極的な男性も多いと検討している。このことから大坂は、女性もさらに積極的にならない限りマッチングアプリの出会いの先にはつながらないのかもしれないと論じる（大坂 2022:19）。

さらに、マッチングアプリにおけるプロフィールに関して、生理的に無理でないか、関わっても危険な人でないかという基準で見ると多い傾向にあるため、容姿に自信がなくても相手が不快に感じないような写真や自己紹介文を心がけることでマッチング率を向上させることが可能だとしている。また、女性は男性と比べ「同居人」「職業・職種」「年収」といった項目の重視度が高く、インタビューを踏まえても、女性はまず恋人として交際する場合でも結婚を意識していると結論づけている（大坂 2022:19）。

#### 4-4. マッチングアプリにおける相互作用

藤村・福井は、マッチングアプリの利用者が異性を信頼するための実践に焦点を当てることで、匿名性が高い状態で社会的交換を行う条件を明らかにしようと試みている（藤村・福井 2020:60）。マッチングアプリ利用経験者の語りから、利用者は面会前の相互行為の場をマッチングアプリ内のチャットから LINE へ移すことで、ブロック機能で相手を排除する選択肢を保持しながら匿名的な関係のまま相手との心理的距離を近づけていると分析する。社会的交換においては、相互作用による人間関係的信頼の形成に加え、SNS のシス

テム信頼が補完的な役割を果たしている」と提示している（藤村・福井 2020:82-83）。

また、インターネットを舞台とする他者との出会いや相互作用について、異性との出会いを日常的に得られない個人が、大量の異性群の中から相手を選び、能動的に関係を獲得していく様子は、仲人が媒介となって成立させる仲人婚などと比較して個人に大いなる選択の余地を与えていると考察している（藤村・福井 2020:83）。以上のことから、結婚相談所とマッチングアプリは、出会いの場の提供という点では共通しているものの、その選択における主体性の高さが異なると考えられる。

## 5. 恋愛の代替可能性

### 5-1. 「もっといい人がいるかもしれないシンドローム」の広まり

山田（1996）は、著書『結婚の社会学：未婚化・晩婚化の広まり』において、「もっといい人がいるかもしれないシンドローム」を検討している。「もっといい人がいるかもしれないシンドローム」とは、恋人として付き合うぶんには良いが、いざ結婚となると「もっといい人がいるかもしれない」と思って結婚を先延ばしにすることを表している（山田 1996:142-143）。

もともとのシンドロームには、魅力のある女性がかかりやすいとされていた。女性にとって結婚は「生まれ変わり」と捉えられるため、何度も付き合った経験のある女性ほど「前の人の方がよかった」と考えて現在の相手と結婚に踏み切らないケースが考えられるからだ。実際により良い恋愛対象が現れるかもしれないし、一生現れないかもしれない。どちらにしても結婚は遅れ、未婚のままにいる人が増えていくと考えられる（山田 1996:143）。

しかし1990年代以降、「もっといい人がいるかもしれないシンドローム」がより広い層に浸透していったと山田は述べる。理由は2点挙げられており、第一に、出会いを運に頼ろうとする意識の登場だ。「星占い」「血液型占い」「今日の運勢」といったページが女性誌に多く見られ、そこにはいつ、どこで素敵な異性とめぐりあうかという内容のものが多くという。友人や知り合いが魅力ある人と結婚したとき、心の中でその夫婦を「不釣り合い」だと考え、理想的な異性と結婚できることは実力ではなく運のおかげだと決めつける傾向にある。「いつか王子様が迎えにきてくれる」と言う一種のシンデレラ・コンプレックスの変形ともいえるこの考え方が、「もっといい人がいるかもしれないシンドローム」の拡大に寄与していると山田は考える（山田 1996:146-147）。

第二に、結婚（相手）紹介業の興隆だ。1970年以前のいわゆる「見合い」は、親戚や職場の上司がセッティングするものであり、それゆえに断りづらい雰囲気があったという。しかし、その後の結婚紹介業は「会員の豊富さ」と「気軽に会えること」が理由となり、結婚を増やす機能を果たしていない。多くの人が紹介され、それを気軽に断ることができるという状況において、利用者は「この人もよさそうだが、次にもっといい人が紹介

されるかもしれない」という感情を煽られる。さらに、利用料金が高いことで、「これだけ高い入会金を払っているのだから、素敵な人と巡り会わなければ損だ」という意識が働き、そこそこの人と妥協しようという気持ちは芽生えなくなる（山田 1996:148-152）。

山田が提唱する「もっといい人がいるかもしれないシンドローム」は、恋愛対象の豊かさや、恋愛をすることへの気軽さから発生している。この条件が共通していることから、現代におけるマッチングアプリ利用者にも同様のシンドロームが拡大していくのではないかと考えられる。

#### 5-2. マッチングアプリにおける恋愛の代替可能性

インターネットの普及とそれに伴うメディア環境の変化により、物理的な「場所感」は喪失したと羽瀨は述べる。本来、場所とそこにある身体とは結びつけて捉えられるものであるにもかかわらず、電子空間においては個々人の属性を規定する場所の意味が失効したといえるからだ。この状況において、人々は人間関係を形成する際、付き合う相手の属性に条件をつけるようになっていった（羽瀨 2022:205-206）。

オフラインの合コンのような出会いの場において、参加者は気になる相手だけでなく競争相手やその場で選ばれないメンバーへの配慮をしていた。一方で、オンラインサービスのマッチングアプリにおいて他者はその過程に登場することがないため、一見すると恋愛における出会いの労力は削減されたと考えられる。しかし羽瀨は、これらの出会いからはじまる交際の質が良くなっているかは疑問だと述べる（羽瀨 2022:206）。

交際経験人数が多い人ほど出会い系サイト・マッチングアプリを利用するという分析結果から、利用者は山田（1996）のいう「もっといい人がいるかもしれない」症候群の傾向があるかもしれないと羽瀨は述べる。簡単に出会いが見つかるのであれば、現在交際している相手にしがみつ়く必要がないからだ（羽瀨 2022:206）。

さらに羽瀨は、出会いの空間の再編のなかで、大学生の恋愛交際相手との出会いの方法は広がるどころか狭まったと結論づけている。オフライン空間において交際相手を見つけられない場合、出会い系サイトやマッチングアプリへの利用を水路づけられているのだ（羽瀨 2022:206）。

#### 6. 先行研究における課題と本研究の目的

これまで挙げてきたように、恋愛の出会いに関する研究や、マッチングアプリやその利用者に関する研究は行われている。しかし、その具体的な研究対象は利用者の特性や設定されるプロフィールに留まっている。本研究では、マッチングアプリの利用者における「ときめき」や「代替可能性」といった恋愛観に着目して分析を行なう。

## II 調査

### 1. インタビュー調査

#### 1-1. 対象と方法

男性7名、女性11名の計18名に半構造化インタビューを実施した。ゼミに所属する学生、教員のネットワークを用いたスノーボールサンプリングによってマッチングアプリの利用経験がある対象者を集め、2022年10月～12月の間に1時間～2時間程度の聞き取りを行なった。

表1には調査対象者のマッチングアプリ利用経験をまとめている。

【表1】インタビュー対象者の基本情報

表記名	ジェンダー	年齢	職業等	アプリ以前の交際経験	アプリ利用期間	利用したことのあるアプリ
A	女性	21	大学生	あり	1年	pairs, with, タップル, Tinder
B	女性	21	大学生	なし	tinder:約1週間, タップル:約1年	タップル, Tinder
C	女性	20	大学生	あり	1ヶ月	pairs, タップル, Tinder
D	女性	21	大学生	あり	4ヶ月	タップル, Tinder, Twitter
E	女性	21	大学生	あり	2週間ほど使ったあと、1ヶ月空けて様々なアプリを活用し、合計約1年間	pairs, with, タップル
F	女性	21	大学生	あり	3週間	with
G	女性	21	大学生	あり	2ヶ月間のおと、1週間、その後2週間	タップル, Tinder
H	女性	21	大学生	あり	1ヶ月使った後、1年空けて1ヶ月	Tinder
I	女性	20	大学生	なし	2ヶ月半程度	タップル
J	女性	20	大学生	なし	1ヶ月	タップル
K	女性	20	フリーター	あり	2週間	Tinder
L	男性	20	社会人	あり	2ヶ月	タップル, Tinder
M	男性	21	大学生	あり	5ヶ月	pairs, with, タップル, Tinder
N	男性	21	大学生	あり	約2ヶ月間	pairs, タップル, Tinder, ハッピーメール
O	男性	21	大学生	あり	1年	タップル, Tinder
P	男性	21	大学生	あり	不明	Tinder
Q	男性	21	大学生	あり	約2年	pairs, タップル, Tinder
R	男性	22	大学生	なし	3日間, 2週間	pairs, with, CoolBoys!

(出典) 筆者作成

#### 1-2. 調査内容

インタビューにおける質問項目は、石原英樹先生と高橋幸先生によるご指導のもと、ゼミに所属する学生15名で設定した。基本属性として尋ねたのは、年齢、居住地、職業、大学、学部、学年、性別、居住スタイル、所属サークル、アルバイト、よく遊びに行く場所、1週間に1回以上連絡を取る友人の数、趣味、Instagramリアルアカウントのフォロワー数、利用経験があるマッチングアプリの種類、マッチングアプリの利用期間、マッチングアプリ利用前の恋愛交際経験、出会い系サイトや街でのナンパ経験があるかである。

まず、マッチングアプリの利用目的や利用経緯、「いいね」をする基準や相手と会う基準を尋ねた。また、マッチングアプリでの出会いから結びついた交際の詳細や、マッチングアプリ利用以前の恋愛経験についても尋ねた。さらに、マッチングアプリを利用していることを家族や友人に伝えているかということや、マッチングアプリの捉え方や持っている恋愛観、コミュニケーション能力への自己評価も尋ねた。

#### 1-3. 研究における倫理的配慮

事前にインタビューの目的や内容といった情報を共有し、それらを理解した上で参加す

るか意思決定をしてもらった。答えたくない項目には無回答で構わないことや、途中でインタビュー辞退も可能であること、研究による成果を学術上の場で発表することはあるものの、個人を特定する情報は補完しないため特定されないことを説明した。

#### 1-4. 結果

##### 1-4-1. マッチングアプリ利用と恋愛における「ときめき」

実施したインタビュー調査での会話より、マッチングアプリ利用者が恋愛の「ときめき」についてどう考えているか分析する。下線は宮田によるものである。

質問者：マッチングアプリでの出会いと、そうでない出会いに違いはありますか。

C：ある。なんか、マッチングアプリはつまらない（笑）

質問者：ドキドキしない？

C：ドキドキしないです。本当にこれ。なんかもう 2回目遊べたら確実に付き合えるだろうなみたいな。見えちゃうから。あんまり駆け引きがない。

Cさんは、マッチングアプリでの出会いに対して「つまらない」「ドキドキしない」という回答をしている。「2回目遊べたら確実に付き合えるだろう」という発言から、恋愛対象と交際関係に発展するかどうかという部分に緊張感がないと感じていることがわかる。この要因としては、マッチングアプリを利用している時点で恋愛をすることが前提であるため、マッチングしてから複数回会うまでに至った時点で交際することがある程度確実だと感じる事が考えられる。

質問者：マッチングアプリの出会いとそうでない場合の違いはありますか。ある場合はどのような違いですか。

J：最近思ってるのは、やっぱり自然にサークルとか学部とか出会った方が言いやすい。人にね。私の友達で最近サークルで付き合ってたって話を聞いたけどそっちの方が出会いとしてロマンチック。人に語れる馴れ初めがあるのがいいなって思う。でもアプリの場合だと「どうやって出会ったの？」って言われて「アプリ」って言って「ああそうなんだ」ってだけじゃん。ドラマとか映画とかみて恋愛を学んでいるわけだから、そういう出会い方をしたいなって思っているにも関わらず、アプリで出会っているっていう後ろめたさがアプリにはあると思う。

質問者：ドキドキ感は違う？

J：私は知らない人と会って話すことに緊張とかしないから、アプリで会った人と待ち合わせする時も全然緊張しなかったし、それは普通に初めて会う人がアプリだったかサークルだったかっていう違いはあんまりない。

質問者：前好きだった人はドキドキしてたわけじゃん。

J: いや、それがあんまりなんだよね。

質問者: 緊張のドキドキじゃなくて恋の

J: 前好きだった人の時は会ってる時はあんまりドキドキしたりしない。会えて嬉しいなあって思うぐらい。でも家に帰った後とかにずっと頭の中の 60 パーセントぐらい好きな人のことって感じだった。

質問者: それはその人だったからなのか、現実でちゃんと出会ったからなのか。

J: それはその人だったからじゃない？

質問者: もしその人とマッチングアプリで出会っててもそうだった？

J: ええ、それは違うかも。やっぱりバイト先で出会ってるから、どういう人かっというのと一緒にお話をする、一緒に働く、一緒に喋るとか通して分かっていくじゃん。でもアプリで出会った人だとかうやって落ち着いて喋ってるだけじゃその人全部を分かっているわけじゃない。そこは違うと思う。大学とかだったらその人がどうやって授業を受けているかとかどうやってプレゼンしてるかとかそういうの全部通して好きになるかもしれないけど、アプリは話してることしか見えないじゃん、それで好きになるのは無理かもって思ってきた最近。

Jさんは、自分と話している状態の相手しか知らない状態で好きになることを「無理かも」と話している。恋愛において、相手が自分以外の人とどう関わっているのか、恋愛以外の場面においてどんな振る舞いをしているのかということに重きを置いている人にとって、自分に対してのコミュニケーションしか知らずに進んでいく恋愛には抵抗があるのだろうか。Jさんの言葉から、恋愛における「ときめき」は緊張からくるものとは一概に言えず、自分以外の他者と恋愛対象者との関わりを見ることから生まれうるものだと考えられる。

質問者: マッチングアプリでの出会いとそうでない出会いの違いはありますか。

O: あります。マッチングアプリの出会いは、前提が向こうが自分の見た目とか性格が好きじゃね。リアルな出会いはわりと「この人私のことどう思ってるんだろう、ドキドキ」がある。最初の誘いがもしかしたら断られるかもしれないわけじゃん。アプリだったらこの人いけるなと思っていいねしてくれてるわけだから、その辺のドキドキは全くなくて。逆にこれをどう上手く相手を傷つけずに、例えば付き合いたいんだったら付き合いたいことを伝えるのか、遊びたいんだったら遊びたいことを伝えるのか、みたいな目的の違いの比べ合わせみたい。向こうが付き合いたいのに自分が遊びたかったらその辺の摩擦あるし。

Oさんは、マッチングアプリでの出会いやそこからの恋愛関係構築に関して「ドキドキは全くなくて」と話している。この言葉は、マッチングアプリでの恋愛関係において、相

手が恋愛対象であるかそうでないかという駆け引きがオフラインコミュニティでの恋愛関係と比べて少ないことに起因していると考えられる。「ドキドキ」という言葉を選んでいることから、本稿で論じている「ときめき」が少ないという趣旨の発言だと判断できる。

#### 1-4-2. マッチングアプリ利用と恋愛の代替可能性

実施したインタビュー調査での会話より、マッチングアプリ利用者が恋愛の代替可能性についてどう考えているか分析する。下線は宮田によるものである。

質問者：マッチングアプリでの出会いとそうでない出会いに違いはありますか。

I：違うなって思います。リアルとかだと、どういう人間か、とかどういう趣味か、とか探るところから入るじゃないですか。っていうか、最初から対面なのと文面っていう違いがあるのも大きいかも。文面だとすぐに返さなきゃ！があんまりないし、返事考える時間もあるけど、現実だと即レス基本なのでテンプレなこととか当たり障りのなさそうなことしか言えないなと思います。あと、検索機能使ってればですけど、もう初めからカテゴライズされてるじゃないですか。こういう特徴を持っている男たち集めてみました、みたいな。リアルだとそうじゃないのでね～。うん。

質問者：ふん。では、アプリを使用する前後でイメージはどのように変化しました？

I：変化？ん～、使う前まで割と切羽詰まってる人がやるのかな～とか、ちょっと危ないのかな～とか考えてたんですけど、そうでもないかも～？って。またがある感。

質問者：ほう。

I：あ～あと！めっちゃ手軽に探せる！って気持ちでいたんですけど、いいねさばくの大変だった（笑）思ったより反応きて、なんか逆に手軽じゃなくなったというか。反応くれた人皆を比べちゃって。簡単にマッチしようと思えばできるのかもですけど、人によって書いてあるポイントとか、文量とか違うので、同時に比較するの割と大変でした。

Iさんは、マッチングアプリにおける「いいね」について「さばくの大変だった」と話している。Iさんは女性であり、男性からたくさんくる「いいね」に目を通し、そこから気になる人を絞っていくことを「さばく」と表現している。このことから、その数の多さに負担を感じていることが推察できる。Iさんのような利用者は、交際に発展した人と良い関係が続かなかった場合でも、そこからマッチングアプリ上で次の人を探そうという考えには至らない可能性が高いと考えられる。

質問者：高校時代の彼とかね、向こうから現実っていうかアプリじゃないところで

好意を向けられた時もあったじゃん。それってさなんかアプリの恋愛と違うなって思う？

A：違うなって思う！

質問者：それは何が違うの？

A：なんかなんだろう、アプリっていい意味でも悪い意味でもめっちゃ素出せる気がするの。でもやっぱりリアルってさなんかその、アプリって相手にどう思われてもいいやの精神でいけるじゃん割と。リアルだとちょっとなんか向こうもやっぱりさ世間体気にするとかさ、割といい人でいてくれる立ち振る舞いをしてるじゃん、リアルで会う人って。いい人っていうものが割と自分の中で蓄積されてるみたいなの。なんかその人の理想像みたいなのがちんとあって、あるみたいなの感じしない？リアルのほうが。だから割とよく見えがちな気がするリアルのほうが。

質問者：じゃあそのアプリでは、相手も自分に対してアプリだから素を出しているなって感じるってこと？

A：え、うん割と。あとなんかさそんなぶっちゃけた話とかできないじゃん、なんか今までこういう人と付き合ってきて、みたいなやつとかもさ。なんかもうどこでどうつながっているかわかんないからリアルな時ってさ、最初から元カレの元カノの過去の話とかさ、あんまり人に言えないような話とかもしないじゃん。でも、アプリってもう会わないかもしれないしいいやって感じでお互いにもう何でも話しちゃうし話せる感じだから、A は本当に猫かぶんないのアプリの人と会うときは。だからかな、なんか相手もめっちゃ素だしてくれる感じして、だから仲良くなるのが早いアプリの方が。

質問者：じゃあリアルで異性と話すよりもアプリの異性の方が全然話しやすいみたいなの。

A：話しやすい！なんでも話せるもん。

Aさんは、マッチングアプリでの恋愛に関して「相手にどう思われてもいいやの精神でいける」と話している。もう相手と会わないかもしれないという条件下では、自分の素の性格をさらけ出したコミュニケーションを取ることができ、相手と仲良くなりやすいという。このような利用者にとっては、マッチングアプリでの恋愛はオフラインの恋愛よりも手軽なものとなり、代替可能性を視野に入れやすい可能性がある。

質問者：アプリのメリットとデメリット。

C：メリットは絶対出会うことない人と出会える。

質問者：あー。

C：だって普通に生きてたら絶対出会わない人達じゃん？プラス、自分が選べる、選ぶ側になれる一応。イケメンを選べるし（笑）

質問者：(笑)

C：イケメン選べるし、選ぶ立場にはなれます。あとはなんだろうね、まあでもそうだね、冷静に考えて、無駄がないかも。現実だと、自分が全く興味ない人から言い寄られてもなんかそんなにひどい対応取れないじゃんさすがに。

質問者：うん。

C：アプリだから自分がこの人無理って思ったらすぐブロックしちゃえばいい話だから。効率良くは進められる。しかも、探すにあたって、条件を調節できるから。なんだろう、例えば、20歳から29歳の人しか表示しないとかもできるから。

Cさんは、オフライン空間においては「全く興味ない人から言い寄られてもそんなにひどい対応取れない」のに対し、マッチングアプリにおいては「自分がこの人無理って思ったらすぐブロックしちゃえばいい」と話している。このことから、マッチングアプリの恋愛だという事実それ自体が理由となって割り切った恋愛をする利用者もいることがわかる。「効率良く進められる」という発言からは、相手との関係が思うようにいかない場合、すぐに次の相手を探すこと、まさに「代替可能性」を見出していることが考えられる。

## 2. オンライン調査票調査

### 2-1. 対象と方法

2023年7月中旬に、明治学院大学社会学部の授業受講者263名（男性55名、女性195名、性別不詳13名）を対象に実施した。オンライン調査票調査の形式を取り、有効回答数は263件、分析回答数は250件であった。調査設計者は明治学院大学の石原英樹先生、鬼頭美江先生、石巻専修大学の高橋幸先生、立正大学の山田順子先生である。

### 2-2. 測定変数

#### 1) Big Five、自尊心

Big Five (小塩ら, 2012)、自尊感情尺度 (箕浦・成田 2013) を用いた。「活発で、外交的だと思う」「ひかえめで、おとなしいと思う」等の項目を含む12項目から成っている。「あなたのことについてお尋ねします。次のそれぞれの項目が、あなた自身にどの程度当てはまるのかをお答えください。(各項目についてもっとも適切な選択肢を選んでください)」という教示文を提示し、1 = 全く当てはまらない、2 = 当てはまらない、3 = あまり当てはまらない、4 = やや当てはまる、5 = 当てはまる、6 = 非常に当てはまる、の6件法で測定した。

#### 2) Mate Value

Edlund、Sagarin (2014) の「Mate Value」を用いた。「全体的にみて、あなたは自分自

身が恋人としてどの程度魅力的だと思いますか？」「全体的にみて、異性はあなたのことをどの程度恋人として魅力的だと評価すると思いますか？」等の項目を含む4項目から成っている。「人々の多くは、将来結婚するかもしれない相手を探すときに、特定のある性質に注目します。いくつかの望ましい特性の中には次のようなものがあります：楽しい人物かどうかや、年齢、身体的な魅力、ユーモアのセンスがあるかどうか、親切で理解のある人か、経済的または社会的に地位のある人か、知的であるか、健康であるか、そして子供が好きか、などです。各質問についてもっとも適切なものを選んでください。」という教示文を提示し、1 = 非常に魅力的でない～7 = 非常に魅力的、の7件法で測定した。

### 3) 孤独感

五十嵐（2019）から引用した。「あなたは、自分に仲間付き合いがないと感じることがありますか」「あなたは、疎外されていると感じることがありますか」「あなたは、他の人から孤立していると感じることがありますか」の3項目から成っている。「以下は、あなたがふだんの生活のさまざまな場面で、どのように感じているかについての質問です。もっともあてはまる選択肢を回答してください。」という教示文を提示し、1 = まったくない、2 = ほとんどない、3 = たまにある、4 = よくある、の4件法で測定した。

### 4) 一般的信頼

「ほとんどの人は基本的に正直である」「ほとんどの人は信頼できる」等の項目を含む6項目から成っている。「以下のそれぞれの項目について、あなたの考えに一番近い選択肢を1つを選んでください。」という教示文を提示し、1 = 全くそう思わない、2 = そう思わない、3 = どちらともいえない、4 = そう思う、5 = とてもそう思う、の5件法で測定した。

### 5) リスク選好

Blais、Weber（2006）から引用した。「自分の趣味が友達と違っていることを認める」「主な問題点において父親と合意しない」等の項目を含む12項目から成っている。「私たちは、しばしば危険に立ち会います。危険とは、結果が不確定であったり、ネガティブな結果をもたらす可能性があったりする状況の中に存在します。しかし、それらの行動が危険かどうかという評価は、個人の直感的な考えによるところがあります。ここでは、個別の状況や行動があなたにとってどれくらい危険であるかという直感的な評価をお聞きします。以下のそれぞれの文章について、あなたはそれらの状況をどれくらい危険であると認知するか、「まったく危険ではない」から「非常に危険」までの6段階でお答えください。」という教示文を提示し、1 = まったく危険ではない、2 = 危険ではない、3 = あまり危険ではない、4 = やや危険、5 = 危険、6 = 非常に危険、の6件法で測定した。

#### 6) 喫煙・飲酒・ギャンブル経験

国民健康・栄養調査、久里浜医療センターの「ギャンブル障害およびギャンブル関連問題の実態調査」(2021)を抜粋、参考にまとめた。「あなたはたばこを吸いますか。」に対し、1=毎日吸っている～4=吸わない、の4件法、「あなたは週に何日くらいお酒(清酒、焼酎、ビール、洋酒など)を飲みますか。」に対して、1=毎日、2=週5～6日、3=週3～4日、4=週1～2日、5=月に1～3日、6=ほとんど飲まない、7=やめた、8=飲まない(飲めない)の8件法、「あなたはこれまでギャンブル(宝くじ、パチンコ、パチスロ、競馬、など)をしたことがありますか。複数のギャンブルを経験したことがある方は、その中でも最も頻繁に行っている(行った)ものについて回答してください。」に対し、1=過去1年間、平均して週1回以上している、2=過去1年間、平均して週1回未満している、3=以前はしていたが、1年以上していない、4=したことがない、の4件法で測定した。

#### 7) Maximizer

Newmanら(2018)、Mikkelsenら(2013)から引用した。「私は、現在の恋愛関係を、他のあり得る関係と常に比べている。」「現在の恋愛関係にどの程度満足しているかにかかわらず、私はより良い関係をいつも探している。」等の項目を含む16項目から成っている。「以下のそれぞれの文章について、あなた自身にもっともよく当てはまるものを選んでください。できるだけ正確に回答してください。」という教示文を掲示し、1=全く当てはまらない、2=当てはまらない、3=あまり当てはまらない、4=少し当てはまる、5=当てはまる、6=非常に当てはまる、の6件法で測定した。

#### 8) 愛着尺度

加藤(1998)から引用した。「私にとって、人といつも心が通じ合う関係をもつことは、簡単である。私は人に頼ったり頼られたりすることに抵抗がない。私は一人ぼっちになってしまうとか、人がありのままの私を受け入れてくれないのではないかということに心配しない。(安全型)」「私は人といつも心が通じ合う関係がなくても平気だ。私にとって大切なのは、人に頼っていないと感じること、自分でなんでもできていると感じることだ。私は人に頼ったり頼られたりすることが好きでない。(拒絶型)」「私は人と完全に気持ちを通じ合うようになりたい。しかし、人は私が望むほど私と親しくなりたいと思っていないと思う。私は親密な関係を持ちたいのだが、私が人のことを大切に思うほど人は私のことを大切に思っていないのではないかと心配になる。(とらわれ型)」「私は人と親しくなることに抵抗を感じている。私は人と心が通じ合う関係を持ちたいのだが、人を信じ切ることはできない。また人に頼ることが苦手である。人とあまりにも親しくなりすぎると傷ついてしまうのではないかと思う。(恐れ型)」の4項目から成っている。「あなたが、いろいろな人間関係の中で経験する「人に対する感じ方や考え方」には、一般的には

次のような4つのタイプがあると言われています。あなたはそれぞれのタイプにどのくらいよく当てはまりますか。」という教示文を掲示し、1＝全く当てはまらない、2＝当てはまらない、3＝あまり当てはまらない、4＝やや当てはまる、5＝当てはまる、6＝非常に当てはまる、の6件法で測定した。また、「次に、上の4つのタイプの中で、自分に最も当てはまるタイプを1つ選んでください」という教示文を掲示し、回答者がどのタイプに当てはまっていると自覚しているか尋ねた。

#### 9) ソシオセクシュアリティ

「愛のないセックスでもかまわない」「色々な相手と“軽い気持ち”でセックスすることに心地よさを感じたり、楽しんだりする自分を想像できる」「長期的で、真剣な交際をしようと思うまで、相手とセックスしたくない」の3項目から成っている。「恋愛に対するあなたの考えや行動についてお尋ねします。次のそれぞれの文が、あなた自身にどれくらい当てはまるかをお答え下さい。」という教示文を教示し、1＝全く当てはまらない、2＝当てはまらない、3＝あまり当てはまらない、4＝やや当てはまる、5＝当てはまる、6＝非常に当てはまる、の6件法で測定した。

#### 10) 生活スタイル

「旅行によく出かける」「衣服や持ちものには、こだわりが強いほうだ」等の項目を含む8項目から成っている。「あなたの生活スタイルについておたずねします。以下のそれぞれの生活スタイルがあなたご自身にどの程度当てはまるかをお答えください。」という教示文を掲示し、1＝全く当てはまらない、2＝当てはまらない、3＝あまり当てはまらない、4＝やや当てはまる、5＝当てはまる、6＝非常に当てはまる、の6件法で測定した。

#### 11) 結婚観・家庭観など

「生涯を独身で過ごすというのは、望ましい生き方ではない」「男女と一緒に暮らすなら結婚すべきである」等の項目を含む8項目から成っている。「結婚、男女関係、家庭、子どもを持つことについてはいろいろな考え方がありますが、以下に例としていくつかの考え方を示しました。それぞれについて、あなた自身はどのようにお考えでしょうか。それぞれ最もあてはまる選択肢を1つ選んでください。」という教示文を掲示し、1＝全く当てはまらない、2＝当てはまらない、3＝あまり当てはまらない、4＝やや当てはまる、5＝当てはまる、6＝非常に当てはまる、の6件法で測定した。

#### 12) 恋愛相手を決める際に重視する要因

「相手の学歴」「相手の容姿」等の項目を含む7項目から成っている。「あなたは恋愛の相手を決めるとき、次のそれぞれの項目について、どの程度重視しますか。それぞれ最も

あてはまる選択肢を1つ選んでください。」という教示文を掲示し、1 = 全く重視しない、2 = 重視しない、3 = あまり重視しない、4 = 多少重視する、5 = 重視する、6 = 非常に重視する、の6件法で測定した。

### 1 3) 恋愛関係流動性尺度

「彼ら（あなたの周囲にいる人々）には、将来恋人になるかもしれない異性と新しく知り合いになる機会がたくさんある。」「彼らは、自分の好みにぴったりな相手と、異性として付き合うことができている。」等の項目を含む6項目から成っている。「あなたの周囲にいる人々（友人や知人、職場の同僚、近隣の住民など）についてお尋ねします。次のそれぞれの文が、それらの人々にどれくらい当てはまるかを、想像してお答えください。」という教示文を掲示し、1 = 全く当てはまらない、2 = 当てはまらない、3 = あまり当てはまらない、4 = やや当てはまる、5 = 当てはまる、6 = 非常に当てはまる、の6件法で測定した。

### 1 4) デモグラフィック項目

基本属性として尋ねたのは、性別、恋愛対象者の性別、年齢、居住している都道府県、居住スタイル（一人暮らしか同居者ありか）、現在の交際相手有無やその出会い、交際期間、過去の交際人数である。

マッチングアプリに関しては、利用実態としてアプリの種類や利用期間、頻度、目的、「いいね」を押す基準やその人数、マッチした人数ややりとりの方法、対面で会った人数や理由、今後もアプリを利用したいと思うか尋ねた。また、利用したことがないと回答した方に対しても、その理由や、アプリの種類ごとにどれくらい利用したいと感じるか尋ねた。

## 2-3. 研究における倫理的配慮

対象者の個人は特定されないこと、また、得られた回答は匿名の情報としてコンピューターで統計的に処理され、研究目的で使用されることはないことを説明した。また、回答したくない項目があった場合には飛ばして次の項目に進んでも構わないことも説明した。

## 2-4. 結果

### 2-4-1. マッチングアプリ利用と恋愛における「ときめき」

性別（男性、女性）、マッチングアプリ利用経験の有無（利用経験あり、利用経験なし）を独立変数として、生活スタイルに関する8項目（S1～S8）に差が見られるかどうか調べるため、二変量の一元配置分散分析を行なった。測定項目は以下である。

#### S1 旅行によく出かける

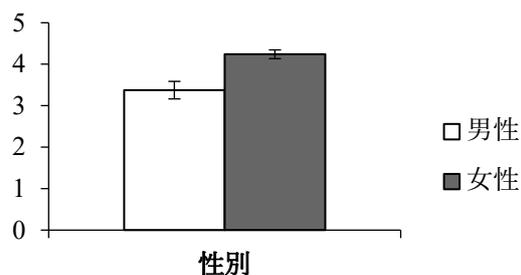
- S2 衣服や持ち物には、こだわりが強いほうだ
- S3 欲しいものを買ったり、好きなことに使えるお金が少ない
- S4 気楽に一緒に遊べる友人が欲しい
- S5 生きがいとなるような趣味やライフワークを持っている
- S6 一人の生活を続けても寂しくないと思う
- S7 異性とうまくつきあえないほうだ
- S8 交際には「ときめき」を期待するほうだ

【表 2】 S2 に対する二変量の一元配置分散分析結果

S2 衣服や持ち物には、こだわりが強いほうだ

変数名	SS	MS	MSe	偏 $\eta^2$	95%CI	F 値	df1	df2	p 値
性別	20.983	20.983	1.589	.051	.011, .112	13.209	1	246	.000 **
アプリ利用経験有無	0.018	0.018	1.589	.000	.000, .010	0.011	1	246	.916
性別*アプリ利用経験有無	4.764	4.764	1.589	.012	.000, .052	2.999	1	246	.085 +

\*\*p<.01, \*p<.05, +p<.1



(出典) 筆者作成

【表 3】 S5 に対する二変量の一元配置分散分析結果

S5 生きがいとなるような趣味やライフワークを持っている

変数名	SS	MS	MSe	偏 $\eta^2$	95%CI	F 値	df1	df2	p 値
性別	0.093	0.093	1.966	.000	.000, .015	0.047	1	246	.828
アプリ利用経験有無	3.989	3.989	1.966	.008	.000, .044	2.030	1	246	.156
性別*アプリ利用経験有無	13.471	13.471	1.966	.027	.002, .078	6.853	1	246	.009 **

\*\*p<.01, \*p<.05, +p<.1

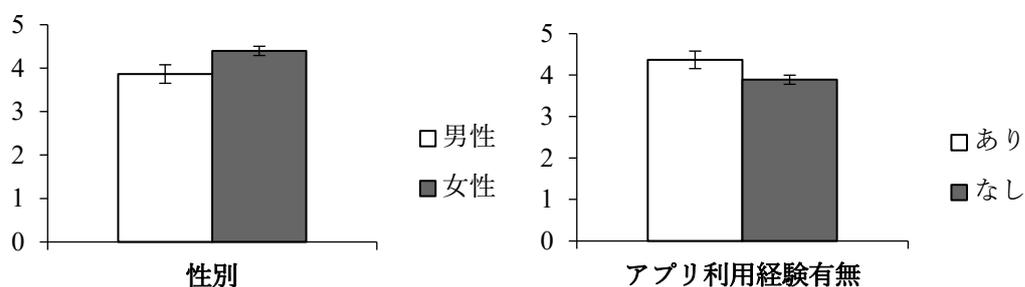
(出典) 筆者作成

【表 4】 S8 に対する二変量の一元配置分散分析結果

S8 交際には「ときめき」を期待するほうだ

変数名	SS	MS	MSe	偏 $\eta^2$	95%CI	F 値	df1	df2	p 値
性別	7.991	7.991	1.606	.020	.000, .066	4.974	1	246	.027 *
アプリ利用経験有無	6.461	6.461	1.606	.016	.000, .059	4.022	1	246	.046 *
性別*アプリ利用経験有無	1.199	1.199	1.606	.003	.000, .031	0.746	1	246	.389

\*\*p<.01, \*p<.05, +p<.1



(出典) 筆者作成

その結果、男性よりも女性の方が「衣服や持ち物には、こだわりが強いほうだ」と回答していることが有意に示された (表 2 参照)。また、男性かつマッチングアプリの利用経験がない人ほど「生きがいとなるような趣味やライフワークを持っている」と回答していることが有意に示された (表 3 参照)。

さらに、男性よりも女性、マッチングアプリの利用経験がない人よりもある人の方が「交際には『ときめき』を期待する方だ」と回答していることが有意に示された (表 4 参照)。

#### 2-4-2. マッチングアプリ利用と恋愛の代替可能性

独立変数は性別 (男性、女性)、マッチングアプリ利用経験の有無 (利用経験あり、利用経験なし) を独立変数として、Maximizer16 項目 (S1~S16) に差が見られるかどうか調べるため、二変量の一元配置分散分析を行なった。測定項目は以下である。

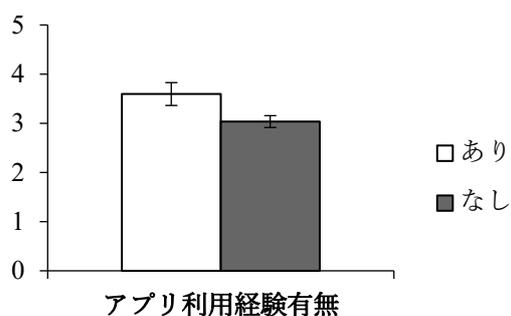
- S1 私は、現在の恋愛関係を、他のあり得る関係と常に比べている。
- S2 現在の恋愛関係にどの程度満足しているかにかかわらず、私はより良い関係をいつも探している。
- S3 私は、別の相手との関係の方が幸せかもしれないと思う。
- S4 私は、常に恋愛関係の選択肢を広く持っておきたいと思う。
- S5 私は、自分の現在の関係を過去の関係と比較し、現在の関係の方が良いかを確認する。
- S6 恋人を決めるとき、私は、1 番良い相手でなければ納得できない。
- S7 私は、「そこそこだ」と思う関係で納得したくない。
- S8 私は、自分が関係に何を求めているか理解しているし、けして妥協しない。
- S9 私は、自分が最良の関係を見つけられると信じているし、けして妥協しない。
- S10 自分にとってふさわしいと思える相手が見つかるまで、私は妥協したくない。

- S11 私は自分にとって完璧な人を選びたいので、恋人を見つけるのは一苦労だ。  
 S12 恋人を選ぶのは、私にとって一苦労だ。  
 S13 私は、適切な恋人を選ぶのにいつも苦労している。  
 S14 私には、本当に好きな相手がなかなか見つからない。  
 S15 私は、自分の期待がすべて満たされたと分かったときしか、関係を続けようとは思わない。  
 S16 他の人たちと比べて、私は恋人をより注意深く選ぶ方だと思う。

【表 5】 S1 に対する二変量の一元配置分散分析結果

変数名	SS	MS	MSe	偏 $\eta^2$	95%CI	F値	df1	df2	p値
性別	0.904	0.904	1.926	.002	.000, .027	0.469	1	246	.494
アプリ利用経験有無	8.826	8.826	1.926	.018	.000, .063	4.583	1	246	.033 *
性別*アプリ利用経験有無	0.313	0.313	1.926	.001	.000, .021	0.162	1	246	.687

\*\*p<.01, \*p<.05, +p<.1

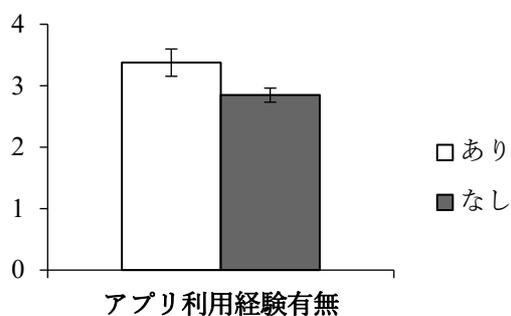


(出典) 筆者作成

【表 6】 S3 に対する二変量の一元配置分散分析結果

変数名	SS	MS	MSe	偏 $\eta^2$	95%CI	F値	df1	df2	p値
性別	0.353	0.353	1.753	.001	.000, .022	0.201	1	246	.654
アプリ利用経験有無	7.887	7.887	1.753	.018	.000, .063	4.499	1	246	.035 *
性別*アプリ利用経験有無	0.200	0.200	1.753	.000	.000, .019	0.114	1	246	.736

\*\*p<.01, \*p<.05, +p<.1

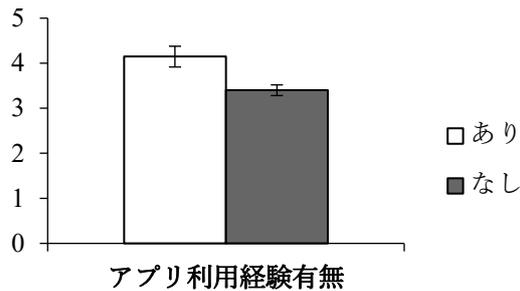


(出典) 筆者作成

【表 7】 S4 に対する二変量の一元配置分散分析結果

変数名	SS	MS	MSe	偏 $\eta^2$	95%CI	F 値	df1	df2	p 値
性別	1.442	1.442	1.904	.003	.000, .031	0.757	1	245	.385
アプリ利用経験有無	15.662	15.662	1.904	.032	.003, .086	8.227	1	245	.004 **
性別*アプリ利用経験有無	2.524	2.524	1.904	.005	.000, .037	1.326	1	245	.251

\*\*p<.01, \*p<.05, +p<.1

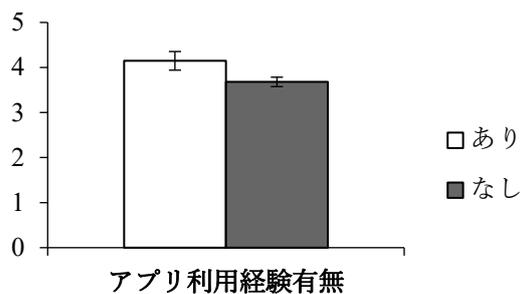


(出典) 筆者作成

【表 8】 S8 に対する二変量の一元配置分散分析結果

変数名	SS	MS	MSe	偏 $\eta^2$	95%CI	F 値	df1	df2	p 値
性別	0.024	0.024	1.524	.000	.000, .011	0.016	1	246	.901
アプリ利用経験有無	6.112	6.112	1.524	.016	.000, .059	4.011	1	246	.046 *
性別*アプリ利用経験有無	0.294	0.294	1.524	.001	.000, .022	0.193	1	246	.661

\*\*p<.01, \*p<.05, +p<.1

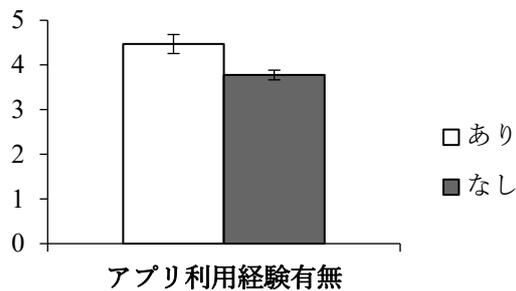


(出典) 筆者作成

【表 9】 S9 に対する二変量の一元配置分散分析結果

変数名	SS	MS	MSe	偏 $\eta^2$	95%CI	F 値	df1	df2	p 値
性別	0.257	0.257	1.618	.001	.000, .021	0.159	1	246	.690
アプリ利用経験有無	13.460	13.460	1.618	.033	.003, .086	8.316	1	246	.004 **
性別*アプリ利用経験有無	0.096	0.096	1.618	.000	.000, .016	0.060	1	246	.807

\*\*p<.01, \*p<.05, +p<.1



(出典) 筆者作成

その結果、以下の5項目に関して、マッチングアプリの利用経験がない人よりもある人の方が当てはまると回答していることが有意に示された(表5~表9参照)。

- S1 私は、現在の恋愛関係を、他のあり得る関係と常に比べている
- S3 私は、別の相手との関係の方が幸せかもしれないと思う
- S4 私は、常に恋愛関係の選択肢を広く持っておきたいと思う
- S8 私は、自分が関係に何を求めているか理解しているし、けして妥協しない
- S9 私は、自分が最良の関係を見つけられると信じているし、けして妥協しない

### 3. 「ときめき」に関する小調査

#### 3-1. 対象と方法

2023年10月中旬に、明治学院大学社会学部の授業受講者221名(男性58名、女性160名、性別不詳3名)を対象に実施した。オンライン調査票調査の形式を取り、有効回答数は221件であった。

#### 3-2. 調査内容

性別、マッチングアプリに対する印象(とても良い~悪いの5件法で測定)、マッチングアプリを利用する場合、「ときめき」を感じる可能性がある項目(複数選択)の4項目から成っている。

#### 3-3. 結果

「もしあなたがマッチングアプリを利用する場合、『ときめき』を感じるとしたらこの中のどの項目がその対象だと想像しますか。」という質問に対する回答は以下のようになった。

【表10】「ときめき」に関する小調査の結果

	回答数	割合
アプリを使用しなかったら出会わなかった人に出会えること	108	48%
初対面時、実際に会ったらオンラインの時よりも自分の好みに当てはまっていたこと	92	41.60%
相手と自分との間に共通項が見つかっていくこと	83	37.60%
相手の第一印象が回数を重ねて良い方向に変わっていくこと	54	24.40%
数多くの人に出会えること	40	18.10%
この中に当てはまるものはない	8	3.60%

(出典) 筆者作成

最も多くの回答を得た項目が「アプリを使用しなかったら出会えなかった人に出会えたこと」であることから、きっかけはマッチングアプリを使用したことで生まれた出会いであったとしても、その恋愛対象と偶然に出会えたこととときめきを感じる傾向があると分かった。この回答において、マッチングアプリの検索機能によって恋愛が一定の条件下で進められていることはあまり意識されていないと考えられる。

その一方で、「初対面時、実際に会ったらオンラインの時よりも自分の好みに当てはまっていたこと」という回答が2番目に多いことから、自分が抱いている理想に相手がより近いと感じることもまたときめきの一種であると考えられる。この感覚は、想定しているイメージが具体的に存在している点でオフラインとは比較し難いものであり、想像と現実のギャップが良い方向に作用しているといえる。

さらに、「相手と自分との間に共通項が見つかっていくこと」「相手の第一印象が回数を重ねて良い方向に変わっていくこと」といった項目に関しては、いずれも回答割合が30%以下となった。こうした項目は、マッチングアプリ特有のときめきとはいえ、オフラインの恋愛においても「ときめき」を構成する要素だと考えられる。

### III 考察

#### 1. 本研究の目的と結果のまとめ

本研究の目的は、「マッチングアプリを利用することで恋愛における『ときめき』は減少するのか」「マッチングアプリを利用することは恋愛の代替可能性を見出すことにつながるのか」を明らかにすることであった。

まず、「マッチングアプリを利用することで恋愛における『ときめき』は減少するのか」という問いに対し、インタビュー調査と質問票調査を分析した。インタビュー調査からは、マッチングアプリの利用において、相手が自分との間に恋愛関係を望んでいることがある程度明確な点で「ドキドキ」すなわち「ときめき」が少ないという回答がみられた。

一方で質問票調査からは、マッチングアプリの利用経験がある人は利用経験がない人と比べて交際に「ときめき」を期待しているという傾向がみられた。また、性別を独立変数に

においても、男性よりも女性の方に正の相関関係がみられた。この結果になった理由として、2つの可能性が考えられる。

第一に、恋愛に「ときめき」を求めている人がマッチングアプリを利用している可能性だ。マッチングアプリ特有の決まった型で恋愛をするという前提があっても、その過程においていわゆる「ドキドキ」は存在する。そのため、恋愛にときめきを求めている利用者層は、マッチングアプリをオフライン空間に近い恋愛のツールとして活用できるのだと考えられる。

第二に、マッチングアプリの存在で恋愛への「ときめき」が増加している可能性だ。特に身近なオフライン空間に恋愛対象が少ない利用者の場合、恋愛対象と出会うことができるというだけで「ときめき」を感じるということが考えられる。また、オフライン空間で恋愛をする経験や可能性がある利用者でも、自分の理想により近い条件の恋愛対象に出会うことができるマッチングアプリではより多くの「ときめき」を感じるのではないだろうか。

次に、マッチングアプリを利用することは恋愛の代替可能性を見出すことにつながるのか」という問いに対し、インタビュー調査と質問票調査を分析した。インタビュー調査では、マッチングアプリでの恋愛に関して「相手にどう思われてもいいやの精神で行ける」という回答がみられた。共通の知り合いがいない恋愛の方が、自分の素をさらけ出したコミュニケーションを取りやすいと感じる利用者にとって、マッチングアプリでの恋愛はオフライン空間での恋愛よりも手軽なものとなり、代替可能性を視野に入れやすいことが考えられる。

質問票調査の結果も同様に、マッチングアプリの利用経験がある人は利用経験がない人よりも恋愛対象に代替可能性を見出しているという傾向がみられた。この結果になった理由として、2つの可能性が考えられる。

第一に、恋愛対象への代替可能性を見出しやすい人がマッチングアプリを利用している可能性だ。恋愛をするための出会いの場としてのマッチングアプリを利用している時点で、ある程度恋愛をしたいという欲求を持っていたり、そこでより良い相手に出会いたいと考えていたりすることが推察できる。

第二に、マッチングアプリの利用によって恋愛への代替可能性を見出しやすくなっている可能性だ。マッチングアプリを利用して多くの人と接することで、こんな人と交際したい、逆にこんな人とは交際したくないといった基準が利用者の中に形成されていくのではないだろうか。また、多くの人と出会うことが可能であるマッチングアプリにおいては、次の恋愛対象にすぐ出会うことができるという状況も影響していると考えられる。

## 2. 本研究の結果と先行研究の関連

羽瀨 (2022) は、マッチングアプリなどの出会い系サイトにおける「スペック」の登録が出会いへの安心感と引き換えに「ときめき」を減少させていると述べていた。また、現代の若者について、恋愛において「ときめき」よりも「一緒にいるときの安心感」を求めている

と論じていた。これに対し、本研究における量的調査の分析からは、マッチングアプリの利用経験がある人は利用経験がない人よりも交際にときめきを期待している傾向がみられ、先行研究と異なる結果が得られた。一方でインタビュー調査からは、実際にマッチングアプリを利用していても「つまらない」「ドキドキしない」、その理由はマッチングアプリ内の恋愛はある程度流れが決まっているからだという回答が得られ、仮説と一致した。

恋愛に対して求めるものは人によって異なる。「ときめき」「ドキドキ」といった刺激を求めている人もいれば、相手との関係性が一定である「一緒にいるときの安心感」を求めている人もいる。個人の価値観によるという前提はあるものの、マッチングアプリにおいてロマンチックな恋愛の規範が再確認されるという Bergstrom (2022) の主張は本研究の分析結果をもって肯定したい。

恋愛の代替可能性に関しては、マッチングアプリの利用者も山田 (1996) がいう「もっといい人があるかもしれないシンドローム」にかかることが考えられる。先行研究では、出会いを運に頼ろうとする意識と結婚（相手）紹介業の興隆の 2 要因によってこれが浸透したとされていた。現代のマッチングアプリ利用者がこのシンドロームにかかるのであれば、後者の要因が近いと考える。マッチングアプリの特性として、手軽に誰もが使用でき、そこで多くの出会いが生まれるということが挙げられるからだ。この状況で利用者は、目の前にいる恋愛対象以外にも自分のパートナーとなりうる相手が多く存在することを実感するだろう。

マッチングアプリを利用することで、インタビュー調査の回答にみられたように「恋愛が効率化する」のであれば、Illouz (2019) が主張するように恋愛は「究極の商品化」に近づいているといえるのではないだろうか。しかし今後、決まった流れを繰り返すことが人々にとっての恋愛になっていくとしても、Giddens (1992) が述べたような「ロマンチック」さは相互のコミュニケーションによってそれぞれの恋愛に存在し続けると考える。

### 3. 本研究の意義

本研究の結果から、マッチングアプリの利用と恋愛における「ときめき」、恋愛対象の代替可能性には相関関係があることが示された。先行研究では、現代の若者は恋愛関係において「ときめき」よりも「一緒にいるときの安心感」を求めていると論じられていたが、マッチングアプリの利用経験がある人はそれがいない人よりも恋愛関係にときめきを求めているという新たな知見が得られた。

### 4. 本研究の問題点・課題

本研究の問題点・課題は 3 点挙げられる。第一に、マッチングアプリの利用と利用者の恋愛観の因果関係を証明できていない点である。前述のように、マッチングアプリを利用することと交際に「ときめき」を求めること、マッチングアプリを利用することと恋愛相手への

代替可能性を見出すことに相関関係がみられた。しかし本研究から、マッチングアプリを利用するという選択によって利用者にこうした傾向がみられるようになると結論づけることはできない。マッチングアプリを利用する人の中に、もとよりその特性を持った人が多かったという可能性が否定できないからだ。本研究はあくまでマッチングアプリの利用と利用者の恋愛観との間に相関関係があるということの証明に他ならず、因果関係を証明できたわけではないという点に留意すべきである。

第二に、調査対象者の範囲が狭く、偏りがあったことである。今回、量的調査は明治学院大学社会学部の授業を受講する者、質的調査は石原英樹ゼミメンバーの友人や、さらにその友人である大学生に限られた。性別のバランスを見ても女性と自認している対象者が多かったため、今後はバランスを取れるようなターゲット設定をすべきだと考える。また、結婚を前提とした恋愛を求めてマッチングアプリを利用しているのか、そもそも未婚か既婚かなどといった条件によって恋愛観は異なってくると考えられるため、より正確な分析をできるよう幅広く調査を進めていきたい。

第三に、「ときめき」という言葉に対する定義が甘かったことや、それに対する質問項目が少なかった点だ。今回、量的調査において「交際には『ときめき』を期待するほうだ」という項目に対し、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の6段階で回答してもらった。しかし、質問票にはどんな状態を「ときめき」と定義するか記載しておらず、回答者それぞれの基準や感覚に任せることになってしまった。また、インタビュー調査でも「ときめき」について詳しく尋ねる質問項目は設定しておらず、マッチングアプリとそうでない恋愛との違いについて語る中で得られた回答を分析するに留まった。

## 5. 今後の検討課題

本研究で、マッチングアプリを利用することと恋愛観との相関関係を見出すことができたため、今後はその因果関係を証明するための調査を行う必要がある。具体的に、2通りの方法が考えられる。

第一に、マッチングアプリの利用経験がない人に協力してもらう方法だ。該当の対象者にマッチングアプリの利用を依頼し、一定期間利用してもらう。その後、自身の性格や恋愛観に変化があったと感じるかどうかが、質問紙やインタビューを通して調査する。この方法を用いた場合、自分が調査対象であるという自己認識がある状態でマッチングアプリを利用してもらうことになるため、無意識下で自分の言動やマインドを統制してしまうことが考えられ、課題になりうる。

第二に、マッチングアプリの利用経験がある人に協力してもらう方法だ。マッチングアプリを利用する前と後でどんな変化があったか、質問紙やインタビューを通して調査する。この方法を用いた場合、利用していた時期からどれくらいの月日が流れているかによってその有意性が異なることや、記憶が曖昧になっている可能性が否めないことが課題に

なりうる。

また、調査対象の幅も広げていく必要がある。今回は明治学院大学に通う大学生を対象に調査を行なったが、別の大学や大学生以外、さらには未婚か既婚かといった分類を行なって比較していくことでさらなる検証を行うことができると考える。

【参考文献】

- Appliv, 2024 年, 「【2024 年】 マッチングアプリの人気ランキング TOP10! アクティブユーザー数を調査」 (<https://app-liv.jp/love/archives/132951/>) 2024.1.6 閲覧.
- Bergstrom, M., *The New Laws of Love : Online dating and the Privatization of Intimacy*, Polity Press, 2022.
- Giddens A., 『社会学第五版』 而立書房, 1992.
- Giddens A., 松尾精文・松川昭子 (訳) 『親密性の変容: 近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』, 而立書房, 1995.
- 羽瀨一代「第9章 出会い文化の変遷: マッチングアプリの利用にいたる途」, 林雄亮編『若者の性の現在地: 青少年の性行動全国調査と複合的アプローチから考える』 勁草書房, 2022 年, pp. 189-207.
- 林四郎 (監修), 篠崎晃一・相澤正夫・大島資生 (編著) 『例解国語辞典: 第八版』 株式会社三省堂, 2013 年, p. 845.
- Illouz E., *Cold Intimacies: The Making of Emotional Capitalism*, Polity, 2007.
- Illouz E., *The Ends of Love*, Oxford University Press, 2019.
- 大阪瑞貴「若者のマッチングアプリ利用と恋愛・結婚観」『現代行動科学会誌』 11-20(38), 2022 年, pp. 12-19.
- 阪井裕一郎『仲人の近代: 見合い結婚の歴史社会学』 青弓社, 2021 年, pp. 32-189.
- 藤村ひかる・福井康貴「匿名の異性との出会いと信頼: マッチングアプリにおける相互行為に着目して」『名古屋大学社会学論集』 (41), 2020 年, pp. 59-83.
- 山田昌弘『結婚の社会学: 未婚化・晩婚化はつづくのか』 丸善株式会社, 1996 年, pp. 142-152.
- 山田昌弘『「婚活」現象の社会学: 日本の配偶者選択の今』 東洋経済新報社, 2010 年, pp. 72-76.